

アジアにおける人間の安全保障とジェンダー: 人文科学の視点から ——アジアのジェンダー表象——

2005年9月16日(金) - 18日(日)

国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)では、今年、第二回目となる国際ワークショップ『アジアにおける人間の安全保障とジェンダー: 人文科学の視点から——アジアのジェンダー表象』を2005年9月16日から18日の三日間に渡り、開催いたしました。2004年に開催された第一回目のワークショップは社会科学の視点に焦点を置き、人間の安全保障という概念から女性がしばしば排除されていることを取り上げましたが、今回のワークショップでは、安全保障を人文科学の視点から見つめ、マスメディアや文化的産物の中で作り出されるイメージが、私たちの生にどのような影響を与えているかなど、文化表象とジェンダーの問題を多角的に捉える試みとなりました。特にアジアにおけるジェンダー表象に注目し、共通点や差異を学びあう貴重な場となりました。

三日間のプログラムは多岐にわたるものでした。一日目には、アジア各国からの参加者が、それぞれの地域におけるジェンダー表象の実態をレポートしてくださいました。また、映画『30年のシスターフッド』の上映会と、制作者トークを開催しました。ウーマンリブ運動に関わった女性たちのポートレイトは、実に生き生きとしており、運動についてよく知らなかった学生たちにも共感を呼ぶ企画となりました。またフォーラム・シアターの企画の中では、学生たちが日本のよくある情景を演じ、それに参加者たちが反応を出し合うというものでしたが、アジアといっても様々な価値観が存在することがわかる活発な議論が展開されました。

二日目にはテーマ別の発表とディスカッションが行われ、言語と権力、美、セクシュアリティとジェンダーの問題が話し合われ、さらには新しい表象の可能性を検討するセッションも持たれました。

三日目は、アジアの女性監督作品を集めた短編映画上映会を催し、それぞれの上映と監督のトーク、そしてパネル・ディスカッションと続けました。この企画は特にどなたでも参加できるものとして、外部においても広報に勤めた結果、200人以上の参加がありました。ジェンダーというものをアカデミックな枠内に押し込みたくないというCGSの活動が、ひとつ実った感がありました。また表象の力を実感した出来事でもありました。ともしれば、偏見を持って捉えられてしまう「ジェンダー」という言葉ですが、文化的なアプローチを取ることによって、より多くの人に届けることができるのではないかと可能性を感じることができ、今後のCGSの活動のひとつの柱が見えてきたように思われます。

CGSが今年のワークショップで目指したことは、大きくまとめて三点ありました。一つ目は、アジアのジェンダー表象について語り合う場を提供することです。ジェンダー表象については、アジアの様々な地域で研究されていますが、その多くは地域内部にとどまっており、また国際的に発信される場合でも欧米に向けての発信が主となっているように見受けられます。私たちは今こそアジアの隣人たちが互いに情報を発信し、類似点や差異から学びあうことが重要と考えました。このワークショップには、研究者、詩人、作家、映画監督、評論家、ジャーナリストなど、アジアで文化表象に関わる様々な人々が集まりましたが、それぞれの社会の事情について、私たちがお互いにかに無知であるか、再認識することとなりました。そして学びあうことの重要性を認識すると同時に、映像や文学作品などを媒介として語り合うことができる楽しさや喜びを発見することもできました。アジアに存在する同質性と多様性を、互いに尊重しながら、助け合い、教えあうことができ

ると実感しました。

もう一つ目指したことは、上述の点と関連していますが、アジアのジェンダー研究／女性学にかかわる研究者、教育者、活動家の間の協働ネットワーク作りにあります。私たちは、このようなネットワークが、アジアにおける今後のジェンダー研究、女性学の発展、研究活動と現場の橋渡しに、大きく寄与すると考えます。実際今回のワークショップには、アカデミックな研究者だけでなく、自主映画製作にかかわる方々や、新しい演劇の形を追求する方々、アクティヴィストの方々、そして学生たちが多く参加・協力してくださり、アカデミックにとどまらず、社会に広がっていく可能性を持つものに少し近づけたのではないかと思います。

また、もう一点私たちが大切にしたいことは、学生が参加できるワークショップにすることでした。常日頃からCGSの活動に協力して下さっている学生の皆さんが、このワークショップの準備と会期中の実務に関しては、非常に大きな力となってくれました。また、これまでCGSに来たことのなかった学生の方々も、映画や演劇の企画を通して参加して下さったことは、非常に嬉しいことでした。所員の授業を履修している学生たちも、ワークショップのディスカッションに参加し、昨年とは少し異なったワークショップになったのではないのでしょうか。大学キャンパスでこのような国際ワークショップを行うからには、将来の日本を作っていく若者たちに参加してもらいたいと考えましたが、予想以上に多くの方が参加して下さりました。ありがとうございました。

ようやく二回目を迎えるCGS国際ワークショップです。反省点も多く存在します。できるだけ多くのことを学び合いたいという気持ちが強く、なかなかプログラムを減らすという行為に至れなかったのですが、スケジュールの過密や、ディスカッション時間の不足は、特に今後の改善点となるでしょう。しかし、ジェンダーと表象の深い関わり、また社会に及ぼす影響の強さを、強く印象づけられたワークショップとなりました。同時にそれは、表象を通じて、社会に働きかけていく可能性をも示唆しています。様々な文化活動に関わる参加者たちの強くて希望に満ちた姿に、大変勇気づけられた気がいたします。参加して下さった皆様、協力して下さった皆様に、厚く御礼申し上げます。今後とも、CGSの活動にご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

国際ワークショップ 2005 コーディネーター
生駒 夏美

プログラム

セッション概略

9月16日(金)

セッション 1 アジア各国のジェンダー表象概論 1

Session 1 Overviews of Gender Representation in Asia I

日本の美術界について

報告: 北原恵 (甲南大学文学部)

今日の日本において、最も保障されず、報道されず、一方で歪めて伝えられている<女>は誰だろうか? それは、従軍慰安婦問題であり、元慰安婦の女性たちだと言えるだろう。

2000年末の女性国際戦犯法廷は、世界各国から大勢のメディアが注目し報道したが、日本国内の主流メディアはほとんど黙殺した。そのなかで、唯一テレビで特集を企画したのが、NHKのドキュメンタリー番組だったが、実際に放映された番組は、法廷の基本的情報すら伝えなかったばかりか、慰安婦の歴史を大きく歪曲するものだった。放映後、上層部や政治家の圧力と右翼の脅迫によって番組が改ざんされた事が明るみに出た。真先に消されたのは姜徳景さんによる《責任者を処罰せよ!》という絵であった。戦後日本のタブーに激しく挑戦するものであったためであろう。

美術界では、1990年代後半に「ジェンダー論争」と呼ばれるジェンダーバッシングが起こった。これは、日本の美術系のミニコミ誌上で「ジェンダー」の視点に立つ美術展や、美術史学の方法の有効性をめぐる論争へと発展し、現在に続くジェンダーバッシングを「先取り」していたとも言える。だが一方で美術界における<女>の活況もある。この夏のヴェネチアビエンナーレの日本館の展示や、栃木県立美術館の展覧会「前衛の女性 1950 - 1975」などは、着実に制作と研究などの活動を続けてきた実績の上に成り立つ成果である。逆風にめげないこれらの女性たちの活動は、1990年代末からさかんになった韓国との交流など、他国との交流によって、ますます活性化してきている。

Report on CGS International Workshop 2005

日本の文学について

報告: 北田幸恵 (城西国際大学人文学部)

現在、性役割、セクシュアリティの規範など、全般にわたって日本のジェンダーは大きく揺らぎ変容している。晩婚化、非婚化による少子高齢社会が進行し、女性たちの社会進出、高等教育への進歩も著しい。女性作家たちは家族制度の桎梏、女性の差別打破、女性の権利の獲得などを掲げ、近代の出発期からその時代の進歩的な思想や運動と連携しつつ、支配的な男性中心文化からの解放をめざす女性の声を表現してきた。現在も大庭みな子、河野多恵子、富岡多恵子、津島佑子、山田詠美などの女性作家が既成のジェンダーやセクシュアリティ規範に挑戦する作品を発表しつづけている。また大庭みな子、米谷ふみ子、多和田葉子などは、狭隘なナショナリズムから脱出し、広い国際舞台でジェンダーを検討する作品を発表し、在日韓国文学者柳美里は日本の中の性や民俗の他者性を追求し、重要な日本文学分野を担っている。

一方、アジアの女性の歩みを阻害した戦争の負の遺産に取り組む作家もいる。林京子の小説『長い時間をかけた人間の経験』と『トリニティからトリニティへ』の二作品は、女性被爆者が被害者の立場から歩み出て、二十世紀から未来へと続く人類の経験を言語によって表象する語り手へと深まりを見せる。日本、アジア、世界の民族や国家の問題と、ジェンダーの問題は、深く関連し、相互に規定しあいつつ展開している今日、アジアの女性の表象を語ることは、今日の人類の困難と希望を語ることに他ならない。

韓国について

報告: イ・ヒャンジン (シェフィールド大学・立教大学)

20世紀最後の10年は、現代韓国政治史にとって大きな節目である。国威をかけた政治改革にも関わらず、97年、韓国は世界通貨基金に多額の援助を求める羽目に陥ったのである。その後も困難な時代は続き、韓国では社会経済システムの有効性を疑問視する声が上がった。この疑問はやがて儒教的家父長制の理想を堂々と否定する流れにつながってくる。民主的で対等な社会へと変貌を遂げる韓国で、大衆は混乱のさなかにあるが、ジェンダー表象はその混乱を映しとる。人気小説やドラマでは、理想的なジェンダー関係や家族の絆の

実現のためにはいまでも伝統的な家父長権威が重要な役割を果たす。繰り返されるそのモチーフは、まるで家父長のリーダーシップや親の保護といったものへの、センチメンタルなノスタルジーを示しているようである。一方、現実にある家父長制への不信も、メディアには反映されている。伝統的な家族関係やジェンダー観への渴望と否定が、このように共存している点にこの発表は焦点を当てる。

中国について

報告: ヤン・リシン (南京師範大学)

80年代半ばまで、中国の学界はフェミニズムへの偏見を色濃く持ち、誤解・抵抗があった。この点と、中国の女性解放運動の特徴、またフェミニズムのポスト近代化的要素が中国では学術的に合わないと思なされていた点が合わさって、中国におけるフェミニズムの浸透が妨げられてきた。これは西洋におけるフェミニズムの隆盛と大きな対比を見せる。また中国の文学批評家たちに起こった「新方式ブーム」とも大きく異なる。これらを考慮することが、中国におけるフェミニズム論とその発展の理解には不可欠である。

セッション 2 アジア各国のジェンダー表象概論 2

マレーシアについて

報告: ウォン・ユエンメイ (マラヤ大学)

70年代以来、マレーシアのフェミニストや女性運動 NGO 関係者、また消費者組織は、メディアの女性表象や、ジェンダー表象を、絶えず批判の対象としてきた。女性を貶める表現や、ジェンダーステレオタイプが取り上げられ、政府やメディア会社に、よりバランスのとれたジェンダー表現を求める際の資料として使われている。特に女性にとってのジェンダー表象の重要性を認識し、メディア制作、経営、クリエイティブの現場にいる女性を応援する方策がとられてきた。女性が発言できる場所をどのように作っていくかということが、ますます重要な問題となってきている。しかし残念ながら、表現の自由を求める女性たちはマレーシアでは国家に対して反動的とみなされ、しばしば規制の対象とされている。本発表では、マレーシアのメディアの民主化にとって、女性の表現する権利がいかに鍵を握っているかを検討する。

インドネシアについて

報告: アドリアナ・ヴェニー (プレムプアンジャーナル編集長)

性的搾取、幼児性愛、人身売買、そして性教育の不足、またメディアにおける物質主義の悪影響などを受け、インドネシアの10代の少女は極めて大きな問題に囲まれている。しかし、インドネシアのメディアには、青少年の権利を保護するための規制法が存在していない。政府による規制、あるいは少なくとも監視システムが必要である。西洋的な美の概念の普及や、社会問題に対する認識を増すような公共広告の不在、過剰に性的であったり暴力的な表現の増加、などがその問題の一端である。インドネシアには放送委員会があるが、これは何の罰則も課さないため、機能していない。そして政府は女性保護の活動も全く行っていない。この国では分娩時死亡率も高いし、DV法も発効していなければ、人身売買防止法も発効していないのだ。女性を暴力から守る法律を作るため、理解を求め、認知を高めるキャンペーンが今非常に必要となっている。

インドについて

報告: パルタサラティ・ラジャラクシュミ (レディ・ドーク大学)

インド社会の現実には多岐にわたる文化が入り混じっているため、ジェンダーを巡る関係性も家父長的から母系的なものまで、様々である。この発表は、インドにおけるジェンダー観を作るのに影響を及ぼす5つの主要な点に焦点を当てる。それらは、インドの神話伝説、宗教、歴史、文学、そしてマスメディアである。インド文化は、多言語、多宗教、そして様々な階級や共同体レベルが混在するにも関わらず、ある種の統合性を持つが、社会の倫理を支えるものの一つがインドの神話体系である。宗教と伝統的慣習とは、父権の確立と女性の周縁化に貢献した。しかし外国による侵略の歴史もまた、女性の地位の更なる下落へとつながっている。インドの人気小説には、男女のステレオタイプなイメージがみとれると共に、その変わりつつある様子もうかがえる。インドのマスメディアは問題含みである。それは彼らが人気を求め、セックス、暴力、ステレオタイプのイメージを流すからである。このような文化的背景の中で、女性たちは自分たちの役割を超越するというよりは、むしろ威厳を持って守り続けているようである。だが全く新しい世界になったのであるから、まずは内なる妄執を捨て去る必要があるだろう。

セッション 3 アジア各国のジェンダー表象概論 3

タイについて

報告: チュティマ・プラガットウティサーン (チュラロンコン大学)

最近になるまで、ジェンダー研究はタイ社会では広く行われていなかった。この数十年はタイの女性に対する学術上の、またアクティヴィストの注目が集まってきたが、ジェンダーそのものへの注目度は低かった。タイの学会会であまり取り扱われてこなかったジェンダー問題に、本論では光を当て、現代タイ文学におけるジェンダー表象を見ることにする。改革以来、タイの文学には「モダン・ウーマン」が描かれ続けているが、その内容は時代によって微妙に異なる。文明改革により女性の教育が普及したが、理想の女性像は、教育はあるものの主婦としてとどまる女性であった。60年代以降の社会経済上の変化によって、外の社会で働く女性像が作られたが、それは家族を支えるために働く女性であり、よき理解者でありつつ伝統的な価値観を守る存在であった。70年代になり、活発な民主化運動によって、政治的にアクティブな女性が登場する。現代はさらに国際的な女性運動に影響を受けた強くて開放的な女性が描かれ、彼女たちは伝統的な役割を拒絶する。しかしその表象は、決して好意的なものではなく、社会が抱くアンバランスを象徴している。

フィリピンについて

報告: マリア・ジョセフィン・バリオス (フィリピン大学)

本論はまずフィリピン女性が自国の文化の中で、どのように構築されてきたかに注目し、次に女性作家やアーティストたちが、それらのステレオタイプに挑戦する像を創造することによって、どのように彼女たちは再構築されてきたかを分析する。フィリピン女性は、植民地支配、帝国主義、グローバル化の経験を経て、幾つかのカテゴリーに分類されてとらわれている。1) スペインによる植民地化がもたらしたカトリックの影響を受けた、マテル・ドロローサのような苦しむ母の像、2) 夫の不貞や子供の欠点に堪える、殉教者の

ような妻、母像、3) 家族の借金を支払うために、家政婦などとして働かされる女性像、4) ロマン스에影響された人物像で、優しい心を持つ売春婦像、5) フィリピン社会で曖昧な存在感を持つ愛人像、6) 独身女性や狂った女性、反抗的な女性などの、異分子としての女性、などがその型である。「髪」をメタファーとして見ると、これらの女性の外見的な要素は、その女性の徳のあるなしに対応したものとして使われており、ひいては、その女性の社会での受容を示していることがわかる。例えばマーテル・ドロローサは常に髪をきちんとまとめているが、借金を支払う女は誘惑的な長い髪を腰まで伸ばしている(昼間はまとめているが、夜はおろす)し、売春婦は派手な髪型をしている。現代的な女性はボブスタイル、外国人労働者は染めた髪といった具合である。これらの女性像は、主にフェミニスト作家やアーティストの努力によって、批判され、新たに作り変えられてきている。

ベトナムについて

報告 ファン・フエン・トゥ (ドキュメンタリー映画監督・詩人)

ベトナムでは、かつて女性の地位が比較的高く、男性とほぼ同権だった。もっとも尊敬を集める女神、聖なる母は、ベトナムの農耕社会に重要な性的エネルギーの源泉とみなされていた。歴史的にもベトナムは、女性の偉人、為政者を輩出している。しかし15世紀に儒教がベトナムに輸入され、状況は一変した。女性が再び男性と同じように社会活動に参加できるようになるのは、第二次世界大戦後のことである。60年代のフランスとアメリカとの戦争を経て、女性たちは少しずつ地位を回復していく。今日では政界を含む様々な分野で女性リーダーが活躍している。経済発展によって家族制度が変化し、独身の独立した女性が増加してきたが、男性にとっての理想の女性像がなかなか変わらないことが、ベトナム女性にとって大きな問題となっている。彼らの理想3Nは、少々まじめ、少々美人、少々愚か、というものである。現代ベトナム女性は、この3Nの理想に合わせて結婚するか、独立と発言力を守るかの二者択一を迫られる。後者を選んだ女性が、しばしば私生活で苦しんだり、家族からのパッシングを受けるとことが、問題となっている。

セッション4 言葉、表現、パワー

20世紀の中国女性文学における言説のポリシー
ヤン・リシン (南京師範大学)

20世紀の中国女性文学の発展は、3段階に分かれる。五月四日運動から40年代、70年代末から80年代初期にかけての「新時代」、そして80年代末から90年代にかけての時期である。第一期の女性作家たちは、母性愛を礼賛し、家父長文化の枠内で表現の権利を獲得することに成功した。彼女たちは、弱い母像を捨て、女性自身の伝統の基礎作りにも貢献した一方、主流文化へのアクセスも確保した。しかし性的言説が欠如しており、彼女たちが封建的モラリティーにしばられていたことがわかる。また彼女たちは家族や社会におけるジェンダーの問題も、扱うことができなかった。80年代になると、ヒューマンイズムの価値観と西洋のフェミニズムの影響もあり、中国女性は性の問題により意識的になる。「新時代」の女性作品に繰り返し登場する「病気の女」のイメージは、現実社会に対抗する身体メタファーのひとつとして読むことができる。90年代になると、性や女性の身体に関する物語がCixousの強い影響下であふれる。しかし90年代半ばになると、「身体」は既に家父長社会の俗なエロティック欲望と商業主義を満たすための、搾取の場となってしまう。焦点はやがて「パーソナルな」作品へと移るが、ナルシスティックな繰り返しや、相対性の欠如などが批判されている。言説のポリシー変化は、このように、中国における女性文学の

発展を示すだけでなく、その弱点や課題をも明らかにする。

伝統の翼にのって飛び立とう

ファン・フエン・トゥ (ドキュメンタリー映画監督・詩人)

ベトナムでは現在、世代間ギャップが深刻な問題である。古い世代は伝統的価値の保持を主張し、若い世代が抱える新しい問題や価値観に気づかない。特に議論の種となるのが、性の問題である。私が参加する「若い詩」運動は、新しいスタイルを用いて、個人的経験などの新しいテーマを扱い、これらの新しい価値観を反映している。新しい言語使用によって、性を改革しようともしている。この運動は若い世代の共感を呼ぶ一方、激しい批判にもさらされている。私自身は、性の問題も核の一つであるものの、新しい言語の創造により関心を持つ。ベトナムの言語は音やメロディー、イメージの豊富な美しい言語であるが、ベトナム人が現在用いるアルファベットによる表記では、この言語の特性を表現できない。ベトナム詩人たちは、長期にわたってこの問題を無視してきたため、既に美しい言語の一部は失われてしまっている。私は古代の言葉をよみがえらせ、それらを新しい言葉と並べることによって、古いフレーズや観念と現代の感情を結び付けようとしている。伝統的なベトナム語の美しさと現代語を組み合わせることで、今日のベトナムを表すのに適当な表現が作れると考えている。

日本人の名前とジェンダー

日比谷潤子 (国際基督教大学)

本発表では「明治安田生命保険名前ランキング」を主たる資料として、1945年以降に生まれた日本人の年代差をジェンダーの視点から考察する。具体的には、1945年から2004年までの60年間を第1期:1945年~1959年、第2期:1960年~1974年、第3期:1975年~1989年、第4期:1990年~2004年の4期に分け、上位に登場する名前の特徴をみていく。第1期と第2期の男性名は、勝(まさる)、勇(いさむ)、進(すすむ)、博(ひろし)、茂(しげる)、隆(たかし)、誠(まこと)のような漢字1文字3拍のものが多く、漢字は、成功・出世・前進・健康・知性などを表すものが大半を占める。これに対して女性名は、和子(かず+こ)、幸子(さち+こ)、洋子(よう+こ)、恵子(けい+こ)のような漢字1文字2拍+添え字「子」のものが圧倒的に優勢で、幸福・平和・愛・正直・寛容などを意味する漢字がよく用いられている。第3期に入ると、健太(けんた)、翔太(しょうた)のような「大・太」のつく男性名が増加し、スケール感が重視されるようになる。この時期前半の女性名は、第1期、第2期とあまり変わらない。しかしながら、後半になると、恵(めぐみ)、愛(あい)、麻衣(まい)、美穂(みほ)、彩(あや)のように多様化、個性化が進み、添え字のつく名前が衰退する。第4期は、名前の中性的化の時代と言える。男女とも海斗(かいと)、拓海(たくみ)、蓮(れん)、美咲(みさき)、萌(もえ)のように、自然に関連する漢字を含む人名が増え、女性名では植物を連想させるものも多い。以上の分析結果は、特定の会社の生命保険に加入している人々の名前のみを対象としたものであるが、関東地方・近畿地方にある中学・高校の同窓会名簿で第1期から第3期に当たる卒業生の名前を調べたところ、ほぼ同様の結果が得られたことから、ある程度の一般性があると考えられる。

セッション5 アートとは何か?: 身体、美、ジェンダー
日本の文化行政はどのように女性身体を見せているか?
ー公共彫刻におけるジェンダー表象
西山千恵子 (東京国際大学)

日本で公共の場に彫像が設置されるようになった明治以降から第二次世界大戦までは、近代国家における国民意識の形成、国家主義、軍国主義的なイデオロギーの見地から、偉人を賛美する彫刻、銅像が多く作られてきた。男性像がほとんどで、女性像はまれにある場合でも、内助の功を尽くして夫の成功を助けた妻、献身的にわが子に仕えた母親など、限定されたステレオタイプの女性像である。大戦後は、戦後日本の国是とされた「平和」「発展」「健康」「産業振興」などの価値を表象する男女の裸像、特に母子像が平和の象徴として、また母性愛そのものの賛美として、全国の都市に設置され続けた。さらに、高度経済成長を経て今日まで、公共彫刻は芸術的価値重視の傾向へと移行しつつその数を増やし、その多くが若い女性のヌード彫刻である。

現在、戦前タイプの公共彫刻と戦後に設置された公共彫刻が混在し、そこには明確なジェンダーの対比が生じている。それらの特徴を簡略化すると以下のようである。①女性はヌード、男性は着衣。②女性は若く、男性は多様な年齢。③女性は自然、男性は文化。④女性は無名で普遍的存在、男性は個別的存在。⑤女性は空間配置において下位(地)、男性は上位(天)。⑥女性は無為、男性は行為・力・緊張。⑦母子像は多いが父子像は少ない。

また、女性像は多くヌード像であることとあわせて、ことさらにエロチックに性的文脈で描かれることが多い。

公共彫刻は、芸術の名を借りたステレオタイプなジェンダー表現の温床であり続けている。日本の文化行政は、公共彫刻設置事業によって、ジェンダー強化政策、女性身体の性的客体化政策を各地で推し進めてきたともいえよう。

ネオ・コロニアルなグローバル化された身体: フィリピンの芸術文学における女性の体に関する考察
マリア・ジョセフィン・バリオス (フィリピン大学)

現代のフィリピン女性の体は、ネオ・コロニアルでグローバル化されていると表現することができる。その肉体は、16世紀にローマ・カトリック教がフィリピン人の生活に浸透し、肉体を「罪の棲家」として糾弾し、隠されるべき、触れざるべき存在としてしまってきた。スペインとアメリカの植民地時代を経て変容してきた。スペイン植民地時代には、熱帯性気候であるにも関わらず、フィリピン人は何枚もの服で身を包まなければならなかったことに特徴的である。19世紀に入りアメリカの支配下に移ると、フィリピン人の肉体は商品となり、また商品の受容者となった。酒やタバコの宣伝にフィリピン人の体が使われる中、フィリピン人の肉体は西洋的な美に基準を合わせ、化粧品やシャンプー、コンディショナー、最新流行のファッション、アクセサリを消費するようになる。現在、フィリピン人の肉体はこのようなネオ植民地化現象に影響されつつけている(美白やダイエット法の流行などに明らかである)。フィリピン女性を、花嫁として、あるいはケアワーカー、使用人として宣伝するウェブサイトを見ると、前者では彼女たちの肉体はエキゾチックなものとして提示され、後者ではフィリピン人の大人しさ、貞淑さが強調されている。こうして、グローバル化の中で、植民地の「レッスン」はまだ生き続けているのである。

セッション6 性とセクシュアリティの表現について
韓国での性とセクシュアリティ表象について
イ・ヒャンジン (シェフィールド大学・立教大学)

本論は日本と韓国映画を文化交差的に分析し、ジェンダー表象の特徴の共通点と差異を見出そうとするものである。日韓映画の比較は、その緊密な歴史的関係ゆえに非常に意味深い。特に、儒教的な文化伝統、外圧による急速な西洋化、国家主導の近代化などの共通点が、これらの映画言説がおかれるコンテクストを共に構成している。本論が扱う四本の映画は、伝統的な共同体中心の人間関係と、「西洋的」な理想との間で、矛盾を抱え、おかしな行動に走る普通の人々を描いたナンセンスコメディ、伊丹十三の『お葬式』(1984年)と『タンポポ』(1986年)、パク・チョルスの『Farewell, My Darling』と『301,302』である。この四作品に見える日韓社会のアイデンティティの危機について扱いつつ、これらの映画で男性の視点から表象される、女性のセクシュアリティと役割の対立に焦点を当てる。日韓の映画の伝統に展開される家族ドラマを、クリエイティブに実験的に表現した伊丹とパクは、共に食べ物象徴的に用い、また男女間の空間的分断を強調する。描かれる女性像の多様性は、家父長制が伝統と近代社会の理想の間に揺れ動き、求めるものも相互矛盾を引き起こしていることを示している。特に食物とセクシュアリティ規範を組み合わせたモチーフは、ポストコロニアル時代の人々の経験の特異性と、変化に対応しようともがく姿を表現するために用いられている。

マレーシアにおける女性のセクシュアリティ: 争論の場
ウォン・ユエンメイ (マラヤ大学)

マレーシアでは、女性のセクシュアリティは文化的・政治的論争の場と化している。よく見ると、女性の肉体をめぐる、マレーシアでは地域的、国家的、そして世界的規模での引力が複雑に絡み合っていることがわかる。特に一般メディアでは、女性のセクシュアリティは消費文化、大衆文化の交差点となっている。その肉体はセクシュアライズされ、客体化され、女性のセクシュアリティが欲望、快楽、客体化の場となっている。一方、政治的文化的な権利闘争が、女性の身体、特にセクシュアリティとの関係で形作られもしている。政治・宗教団体は、団体として嫌悪する性行動やジェンダー行動様式を設定することにより、一致団結しアイデンティティを堅固なものとする。こうして女性のセクシュアリティは様々な規範や規則の元に縛られることとなる。政治的表現すらもセクシュアライズされ、逆に女性のセクシュアリティが政治化された。皮肉にも、女性の肉体をめぐる表現や言説は、女性たち自身による自己批判や身体の意識化現象を生んでいる。女性たちは自己表現や論争を通じて、自分のセクシュアリティとアイデンティティを変えたり、探求しようとしている。本論は、女性の身体とセクシュアリティに働きかける様々な社会政治的な要因の相互影響力と、そこから発生する多義性、矛盾、パラドックスについて検討する。

視線の政治 見る／見られるの関係をめぐる
深澤純子 (港区コミュニティーカフェ・ヒューマンサービスセンター)

2005年春、複数の若い女性に首輪をつけて自宅やホテルで数ヶ月間にわたり監禁していた男性が逮捕された。彼の行動は、女性を監禁して自分に従う動物のように飼育し調教するゲームをなぞったものだといわれている。女性の性的なイメージが日常に氾濫している現在の日本社会にあって、この事件は「虚構と現実の区別がつかない特殊な人物の妄想」の所業とかたづけることはできないだろう。

新聞、テレビ、雑誌、広告媒体、ビデオ、インターネット、ゲーム等々、大量に供給される視覚イメージによって、私たちの日常の行動や思考、ジェンダーやセクシュアリティのあり方にも強い影響があることは、いまや誰も否定できない。

私はこれまで、25年以上、メディアに現れる女性イメージを女性差別という視点から観察してきた。また、1995年よりメディアが供給し、消費されている女性のイメージが示す意味を読み解く作業を、ワークショップ形式にして、多数回実施してきた。この10年間、ジェンダーの視点から見て、メディアの供給する大量の女性イメージは、性役割を強調したものや、男性の性的な対象とされる「見られる性/女性」ばかりで、政策的な男女共同参画社会が進んでも、その量や質において大きな変化は見られなかった。変化したのは、男性の視覚イメージが、男性に向けて大量に供給されるようになってきたことである。それは、ファッションやアクセサリー、自動車、スポーツ、旅行、日常的に使用する製品の消費を促すためのイメージである。特に若い男性たちに、モデルを提示することで、商品による自己実現の欲望が作り出されていく。

では、女性たちが、男性のイメージを見る対象として消費する行為が、男性が女性イメージを作り消費していきたくように進行していくであろうか。女性たちは見る主体を回復しなければならぬ。見る行為も文化的な学習により形成されるものだからである。

語れないことを語る：アンチャンの小説の中のレイブを読む
チュティマ・ブラガットウティサーン（チュラロンコン大学）

性暴力は最近まで、文学論のトピックではなかった。しかし性暴力についての語りの少なさが、タイ社会における性暴力の少なさを意味するわけではない。むしろ、性暴力を扱った語りの最大の特徴は、暴力被害者が体験を語りたく欲求と、世間にその語りが受け入れられるかという不安の、微妙な緊張関係にある。性暴力の問題は、言語のそれと不可分なのである。言語は表現手段のみならず、暴力の意味が構築され、脱構築される手段でもあるからである。本論では、文学賞も受賞したアンチャンの『On the Mouth of the World』(2003年)の分析を通して、タイ社会でなぜ性暴力が語れないものだったかを探る。

この小説はアンという女性についての物語だが、語り手はジョンという男性である。彼がアンのストーリーの著者であり、彼女を彼の視点から解釈し評価するのである。彼の語りの中で、アンは良い女性あるいは悪い女性のどちらかとして描かれる。彼女のセクシュアリティに対するジョンの不安と、それを支配したい欲求の二つを反映している。

セッション7 新たな地平線へ：ジェンダー概念を再定義する
インドの短編小説に見る脱・再神話化
パルタサラティ・ラジャラクシュミ（レディ・ドーク大学）

フェミニスト作家たちは以前から、女性をエンパワーする神話の復興または創造を唱え、神話そのものに興味を持ってきた。本論は現代の二人のインド作家シャシ・デシュバンデとアンバイ・デシュバンデが、インド神話のテーマや登場人物を、重要な文学装置としていかに利用しているかを見る。『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』などの古典は、インド作家に普遍的なテーマを供給するテキストやサブテキストで満載である。これらの文化神話を創造したり解釈することで管理してきたのは、これまで長きにわたり、男性たちであった。しかし興味深いことに、今日の女性作家たちは、古い神話が提唱する社会価値やジェンダー要素について、疑問を投げかけたり、それらのステレオタイプを脱構築することにより新たな神話的キャラクターを作り出し始めている。彼女たちの作品は、伝統的な神話

の別の読みを提供すると同時に、その転覆をも提供している点で、ポストモダンととらえられるだろう。インド社会では、ヒンズー教の神話的テーマやキャラクターが、理想の行動規範の見本として利用されてきたが、本論で扱う二人の作家はそれらを使って、家父長制イデオロギーの差別構造を暴露する。彼女たちは国家全体の思考過程に、根本的な変化をもたらすには、神話の再解釈が極めて重要であると指摘している。なぜなら神話は宗教、世代、ジェンダーを超越して人々を結びつける力のある媒介だからである。

情熱的、不道徳、それとも抵抗の文学か？インドネシア文学における女性性を再定義する
アドリアナ・ヴェニー（プレンプアンジャーナル編集長）

非常に家父長的なインドネシア社会において、女性はしばしば特定のジェンダー役割へと抑圧されている。女性たちが自らの考えやセクシュアリティを表現することは、困難であったが、女性作家の中にはこれまでタブーとされてきたことについて、口を開くものも始めている。しかし彼女たちは不道徳な文学一派とレッテルを貼られてしまっている。本論ではステレオタイプの道徳やタブーに抵抗する三人の女性作家を分析したい。アユ・ウタミ、ディエナ・メーサ・アユ、オカ・ルスミニである。ウタミの作品は、女性の立場から率直にセクシュアリティを扱っている。アユの作品は性暴力の問題を扱っている。またルスミニは、詩人でもジャーナリストでも作家でもあるが、抵抗の文脈を常に提供し、女性たちがあきらめて犠牲者になってしまうことなく、生存者となるように、応援を続けている。

日本の商業アニメにおける女性像の変遷と「萌え」文化：新しいジェンダーを求めて
村瀬ひろみ（山口大学非常勤講師）

日本の商業アニメで描かれる女性像は、日本アニメの隆盛に伴い、ますます多様なキャラクター造形となっている。今日のアニメーションにおいて、従来のような「従順・従属的・自己犠牲的・消極的」といったキーワードで表現される一面的な女性像が描かれることは少ない。たとえば、「戦う」女の子たちがいるが、彼女たちは「守られる」存在ではなく、「守る」存在であり、自身の考えで動く主体的なキャラクターとして描かれている。主体的な女性主人公による物語の系譜の中で、「戦う女の子」のモチーフは大変好まれ、何度も登場する。積極的であること、孤立していないこと、実行力があること、といった「戦う女の子」の属性は、自立した女性像として大変わかりやすい。

一方、主体として存立する主人公の女の子を、性的な対象として読み替え客体化していくというパロディのあり方や、キャラクターの構成要素を分解し、それらの要素にこだわり好みのものを支持していく「萌え」の現象もある。「萌え」は、男性、女性ともに見られ、「萌え」＝女性への差別、女性の物象化と短絡することはできないが、たとえば「萌え」を前提とした女兒向けと銘打った作品があるのも事実である。建前では、明るく、楽しく、元気に、かわいく、「戦う女の子」をやるのだが、その裏では、その主人公の全体性や、作品の物語性ではなく、部分部分の要素（たとえば、服装や髪型）が性的対象として流通している。自分たちの敬愛する主人公が、「萌え」という視線によって、要素にバラバラに分解されて性的な対象物となるという経験が、女の子にどのような影響を与えるかよくわかってはいない。ただ、それが、「女の子たちを「生きやすくする」側面を持っているかどうか」といって、かなり難しいのではないだろうか。

**International Workshop 2005
Human Security and Gender in Asia: Perspectives from the Humanities
Gender Representation in Asia
16-18, September 2005**

CGS held its second international workshop on September 16-18, 2005. It is our second in the series, in which last year we focused on perspectives from the social sciences in considering Human Security. This year the focus is on humanities aspects, and the many-layered attempts to grasp the relationship between gender and cultural representation, how images created in media and culture as a whole affect our daily lives. Our emphasis was especially on gender representation in Asia.

The three-day program was variously approached. On the first day, we had participants from all over Asia present the current situation in each of their own countries. We also had a film viewing of *Thirty Years of Sisterhood* and a talk was given by its producers Chieko Yamagami and Noriko Segawa. The film's portrayal of the women of the Women's Liberation Movement in Japan was very vivid and impressed even those who knew nothing about the movement. In the Forum Theatre session, ICU students offered a skit in which they reproduced scenes from their daily lives. The participants in return responded to the skit, and the heated discussion which followed proved how many various views were present in the Asian context. On the second day, we had presentations and discussions according to various themes. On the third day, we had a film showcase, in which we were privileged to show four short films with a talk by each director afterwards. We also had a panel discussion in the afternoon. This program was open to the public, and we had over 200 people in attendance. It was one of the moments in which the activities of CGS in trying not to confine Gender Studies in the closure of the academic came to fruition. Also, we were happy to realize the power and possibility of visual representation, and it will certainly be one of the core activities of CGS in the future.

One of the purposes of this workshop was to offer a place to talk about gender representation in Asia, as gender in Asia is studied but remains focused quite domestically, and when international communication is ever done, it is mainly with the US or Europe. We feel that our Asian neighbours need to know about and communicate with each other and to learn from our sameness as well as our difference. We are grateful that people with various backgrounds attended this workshop and let us realize how ignorant we are about each other and how joyful to talk with each other through the medium of cultural products. We are sure we will be able to respect each other and learn more from our diversity.

Another goal, related to the above, was to build a network among Asian researchers and activists. We consider such a network to be a valuable contribution to the future progress of Gender Studies and Women's Studies, as well as various revolutionary movements. We were happy to see not only many academics, but film-creators, acting groups, activists, and students in our workshop, as a significant step forward for the permeation of gender studies in society.

One more vital goal was to make this workshop a collaborative event with our students. We owed so much to the students who have been involved in various activities of CGS, who helped us with this workshop too. Also we are thankful to those newcomers, and those who participated in the theatre and film sessions. It made quite a difference and it meant a great deal. We had been hoping to welcome young people, and were very happy to see more than we had expected.

The workshop posits many points of reflection, however. Because of our strong wish to learn as much as possible, the schedule was overloaded, causing a lack of discussion time, which needs to be rectified for the next workshop. However, it was a success in that it made us more aware of the close connection between gender and representation and the power it has on society as a whole. It also suggests the potential of representation as our means to work on society. We feel we were empowered greatly by the participants who are actively and energetically involved in various meaningful activities. We would like to express our gratitude to those kindly attended and helped our workshop. We are hoping to see you again in our future activities.

International Workshop 2005 Coordinator
Natsumi IKOMA

Current Japanese Art

KITAHARA, Megumi (Konan University)

Who are the least protected, least reported(or, if reported, very biased) women in today's Japan? It is "Comfort Women." The trial of the war crime against women in late 2000 was the focus of international coverage, but the major media in Japan did not report it. The only broadcasting company that featured this trial was NHK, though their documentary distorted the historical facts of "comfort women" severely. Afterward, it was revealed that the program was changed under threat by some politicians and the right-wing. The first to be eliminated was the paintings made by a Korean artist, which confronts a taboo of postwar Japanese society. During the late 90s, "gender debate" occurred in the Japanese art world. It was a form of gender bashing. It turned into a discussion on the validity of art exhibitions from gender perspectives and of the methods of the study of art itself. On the other hand, women in Japanese art are more than ever active. The women are working against the main current, with the help they obtain from collaboration with Korean and other international artists.

On Japanese Literature

KITADA, Sachie (Josei International University)

The idea of gender in Japan has been much transformed lately. Late-marriage, or non-marriage changes a society into an aged one with few children. Women have started to go into the public sphere, and they are as educated as men. Japanese women writers, since the beginning of modernity, have been expressing their wish to subvert the male-centred tradition, emphasizing the problems of the family system,

gender discrimination and women's rights. Today, also, we see many female writers confronting the existing norms of gender and sexuality. Some even broaden their issues globally. Another current of Japanese literature is an attempt to reconcile with the negative heritage of World War II. Gender issues, as they demonstrate, are closely connected to racial issues and Japan as a nation. To talk about the representation of Asian women, thus, means to deal with difficulties and the hopes of human beings in today's world.

On Korea

LEE, Hyangjin (Sheffield University / Rikkyo University)

The last decade of the twentieth century marked a watershed in contemporary Korean political history. National pride in successful political reforms was seriously damaged when the country was forced to seek 58 billion dollars from the International Monetary Fund in 1997. The following years' difficulties pushed Koreans to further question the capability and effectiveness of their social-economic systems. The growing scepticism about social systems eventually led to the open disavowal of the ideals of Confucian patriarchy. I will discuss the ways in which gender representation in South Korea reflects and expresses the confusing status of ordinary citizens regarding the rapid restoration of democratic social orders, towards equal human relationship. The traditional authority of the patriarch is still indispensable in materialising the ideal gender relations and familial bonds in popular films and dramas. The indiscriminate representations almost synchronise to induce the nostalgic sentimentalism on his powerful leadership and parental protection. On the other hand, media fantasy cannot avoid scepticism on patriarchal social orders in reality. This paper will highlight this ironic co-existence of craving and denial of the discriminative familial relationship and gender identification reinforced by tradition.

Feminist Poetics in China: Double Contrast and A Culturological Analysis

YANG, Lixin (Nangjing Normal University)

Until the mid-1980s, the Chinese academia had been showing prejudice against feminism, misreading and resisting it. This, coupled with the characteristics of women's liberation in China and the post-modernity elements of feminism that were regarded as an academic misfit in China, explained the rather slow progress in the dissemination and practice of feminism in China, which was in double contrast to the development of feminism in the west and to the 'new methodology boom' among Chinese literary critics. The double contrast has conditioned, if not determined, the basic form of feminist poetics and its trend of development in China.

Beyond Representation: Women and Media in Malaysia

WONG, Yuen Mei (Malaya University)

Since the 1970s, the feminist scholars, women's NGOs and consumer organizations

in Malaysia have been engaged in a constant critique of media representation of women and gender relations in the mainstream media industries. Various women images in the media were cited to demonstrate the under-representation of women and the perpetuation of gender stereotypes in the media. These women images have been used as evidence to negotiate with, or to lobby, the government agencies and corporate media companies for a more balanced gender representation. Recognizing the importance of gender representation for women, various strategies have been deployed to empower women's participation in media production, management and creative work. Increasingly, the issues of creating spaces for women to make their voices heard have become more significant. But unfortunately, women's pursuit of freedom of expression in Malaysia have been perceived as subversive by the state and various restrictions have been imposed to silence them. This paper will argue how women's rights for communication and representation are the key to media democracy in Malaysia.

Young Women on Indonesian TV Screens

VENNY, Adriana (Chief Editor of Journal Prempuan)

Problems of Indonesian teenage girls now have become critical, as we face the spread of sexual exploitation, paedophilia, and human-trafficking, not to mention insufficient sex education, and the bad influence of the media on consumerism. However, the Indonesian media does not have the regulatory system to protect the rights and interests of children. The presenter suggests the need for governmental control, or at least, some governmental monitoring system. The problems include the prevalence of the Western concept of beauty; the lack of an Advertising Council to raise awareness of social issues; over-sexual expressions; the prevalence of violent expressions in media. The Indonesian Broadcasting Commission is not working as it does not impose any penalty fee. So far, the government has done nothing to protect or save women. The mortality rate at birth is still high; the anti-domestic violence law has not been enacted; the anti-trafficking law has not been enacted either. What is strongly needed is an awareness raising campaign to support the enactment of laws which protects women from violence.

On India

RAJALAKSHMI, Parthasarathy (Lady Doak College)

Indian social reality is intermeshed with diverse cultures that are reflected in variant gender relations ranging from patriarchal forms to matrilineal practices. This gender discourse focuses on five major factors that have influenced Indian psyche in evolving and internalizing gender concepts. They are Indian mythology; Religion; History; Literature; and Mass Media. There is a certain unity in Indian culture in spite of its multi-lingual, multi-religious, multi-communal and class setup and Indian mythology is a primary ethos of Indian society. Religious beliefs and traditional practices contributed to the establishment of male superiority and marginalization of women. But it is also the history of foreign invasions that situated the degradation of women's status. Representation of gender in some of the popular Indian Literature brings

out the stereotyped male and female images as well as their changing identities. Indian mass media are problematic as they seek popularity through the images of sex, violence, and stereotypes. In such cultural settings, many women have kept dignifying their roles rather than transcending them. However, they are living in a world that has never been before, and it is first necessary to banish the bogies of their inner hidden world.

PRAGATWUTISARN, Chutima (Chulalongkorn University)

Little research has been done on gender issues in Thai society until recently. Not surprisingly, the last few decades have seen much scholarly and activist attention paid to Thai women but less attention has been given to gender. This paper deals with an aspect of gender that has been underrepresented by Thai scholars, namely the representation of gender in modern Thai literature. Though Thai literature from the Revolution to the present portrays an image of modern women, what exactly is meant by "modern women" varies from one period to another. The beginning of the civilizing reforms has brought about the education of women but the image of "modern women" has remained that of housewives, albeit educated. Socio-economic changes from the 60s onwards affected women's images, since women were encouraged to work outside to help support the family. The ideal image then became that of a good companion who also keeps traditional values. The 70s saw the emergence of active democratizing movements, and the image of politically active, idealist women appeared. Contemporary images, of strong liberated women who reject traditional roles, are affected by international women's movements. However, their portraits are not always favourable, thus showing the social ambivalence towards such women.

Know Her Through Her Hair: Notes on the Construction/ Reconstruction of the Filipina in Art and Literature

BARRIOS, Maria Josephine (University of the Philippines)

The paper looks into firstly how the Filipino woman has been constructed in Philippine culture, and secondly how the Filipina has been reconstructed by women artists and writers, creating characters and sketches that challenge stereotypes. The paper argues that Filipino women have been trapped into categories by the experiences of colonialism, imperialism and globalization: 1) the suffering mother such as Mater Dolorosa as influenced by the Catholic religion imposed by Spanish colonization; 2) the martyr wife and mother who bears her husband's infidelities and her children's shortcomings; 3) the "bayad-utang" or debt payment – a woman sent to work in the house of the landlord or as a domestic worker to pay off family debts; 4) the prostitute with the golden heart, a character influenced by the romance mode; 5) the mistress who is both acknowledged/unacknowledged in Philippine society; 6) the strange/unfamiliar woman – the woman alone, the crazy woman, the rebel. Using the "hair" as metaphor, the paper shows how the woman's physical appearance is equated with her virtue or lack of it and with her acceptability/unacceptability in Philippine society. For example, the Mater Dolorosa image is usually shown with

her hair neatly tied in a bun, the debt-payment woman with seductive long hair up to her waist (usually tied during day but flowing at night), the prostitute with big hair; the modern woman with bobbed hair; and the overseas worker with dyed hair. These woman characters in Philippine literature, art, cinema and theater have been countered or reconstructed largely through the efforts of feminist writers and artists.

Spiritual Violence in Vietnamese Families

Phan Huyen Thu (Film Producer, Poet)

Vietnam was originally the country where women have relatively high status and equal rights to men. The most worshipped goddess is the Holy Mother, Lieu Hanh, whose sexual power is thought to be vital in the farming society of Vietnam. Many prominent female figures and reigns can be found in Vietnamese history, though the introduction of Confucianism in 15th century China changed the situation. It was only after WWII that women were allowed to participate in social activities as men. Women have slowly regained respect during the 60 year-long wars with France and America, and today's Vietnam sees many female leaders in every field, including politics. Economic growth also has brought changes in the family system, and an increase of single, independent women, but men's concept of desirable women remains epitomized by the "3Ns" in Vietnamese, i.e. a bit dutiful, a bit beautiful and a bit silly, which troubles today's Vietnamese women between two choices: conform to the "3Ns" and get married or keep one's own independence and exert some assertiveness. It is of great concern that those who choose the latter often have to suffer in their private lives, being maltreated or punished by their partners.

Discourse Policies of 20th-Century Chinese Women's Fiction

YANG, Lixin (Nangjin Normal University)

The development of 20th-century Chinese women's fiction went through three stages. The first stage, from the May 4th Movement to the 1940s; the second stage, the 'New Period' that began in the late 1970s and the early 1980s; the third stage, from the late 1980s to the early 1990s. Women writers in the first stage celebrated maternal love and won the right to express themselves within the milieu of patriarchal culture. They defied the image of the weak mother and laid the groundwork for constructing women's own tradition, while they successfully gained access to mainstream culture. But the absence of sexual discourse indicated that the writers were still constrained by feudal morality, and they failed to address the issue of gender roles in family and society. In the 1980s, with the restoration of humanistic values and the influence of western feminism, Chinese women became more conscious of sexual issues. The recurrent image of 'sick women' in 'New Period' women's fiction is a form of body metaphor that revolts against the reality and the culture. In the 1990s, stories about sex and the female body flourished under the strong influence of Hélène Cixous, but by the mid-1990s, 'the body' became another exploitative field to cater to banal erotic desires and the commercialism of patriarchal society. Then the focus was moved to 'personal writing,' which, however, comes

under criticism because of its repetitive narcissism and its lack of relativity. The change of discourse policy thus shows not only the development of 20th-century Chinese women's fiction, but also its weaknesses and predicament.

I want to fly upon traditions' wings

Phan Huyen Thu (Film Producer, Poet)

In today's Vietnam, the generation gap is a serious problem; the older generation insists upon the maintenance of traditional values, while unaware of the new problems and new sets of values facing the younger generation. Especially the controversy revolves around the issue of sex. The "Tho tre" or "Young poetry" movement, of which I myself am a part, reflects the new sets of values, using new styles and dealing with new themes such as their personal experiences. It tries to revolutionize sex through new usage of language. It attracts the younger generation as well as fierce criticism. My main concern is more on the creation of a new language, though sex is also one of the focal points. The Vietnamese language is infinitely copious and beautiful, rich in sounds, melodies and images. However, the alphabets we use do not correspond sufficiently and Vietnamese poets have ignored the polysemic characteristics of the language too long, thus caused the loss of beauty in the language. I resurrect some ancient words, putting them side by side with a brand new word. I try to describe feelings of the modern life by classic phrases and concepts. By combining modern words with the beauty of the Vietnamese traditional language, I believe I can come up with the expressions suitable for today's Vietnam.

Japanese Names and Gender

HIBIYA, Junko (International Christian University)

This presentation analyzes the trend of names in Japan after 1945 and its gender implications. The period is categorized into four groups, 1)1945-59, 2)1960-74, 3)1975-89, 4)1990-2004. The top few on each list show the gender tendency in each respective period. For instance, in the period 1) and 2), the male names are often composed of one Chinese character and 3 syllables. The characters chosen are that of success, promotion, advance, health, and intelligence. On the contrary, the female names are mostly composed of two Chinese characters (one meaningful and another meaning "child"). The characters used are for happiness, peace, love, honesty, and generosity. In the period 3), the male names with the characters meaning "big" or "wide" shows how the society cherished the idea of scale in men. The period 4) sees the appearance of genderless names. And the characters used are often related to nature.

How is Woman's Body represented by the Japanese Cultural Administration?: Gender Representation of Sculptures in Public Space

NISHIYAMA, Chieko (Tokyo International University)

In Japan, sculptures have been installed in public spaces since the Meiji Era. From

then up until World War II, they were mainly of male historic figures to aid in the creation of a national and militarist ideology. The few female sculptures were limited to stereotypes of a wife helping her husband's career or of a mother sacrificing herself for her child. After the war, the newly established goals for postwar Japan were reflected in male and female sculptures that represented "peace," "economic growth," "health," and "development." Also, many mother-child sculptures were installed, as they were the symbols of peace, and also of maternal love itself. Since then, the number of sculptures is on the increase, while, after the period of rapid economic growth, the ideology shifted to the promotion of art. And the main figures portrayed are of young women in nude.

The sculptures we can see today are a mixture of pre-war and post-war products, and there are clear differentiations of gender in them. The characteristics of gender in those sculptures are: 1) women are in nude, men in clothes; 2) women are young, men are at various age; 3) women represent nature, men are culture; 4) women are nameless and universal, men are individuals; 5) women's space is below (earth), men's above (sky); 6) women are stasis, men are action, tension, and power; 7) mother-child sculptures are common, but father-child ones are rare. In addition to these, women are often eroticized and sexual connotation can be found.

As is shown, public sculptures are sites for the propagation of gender stereotypes under the guise of cultural promotion. The Japanese cultural administration has been adopting policies to further the objectification of women's body.

The Neo-Colonial Globalized Body: Notes on the Filipino Woman's Body in Philippine Art and Literature

BARRIOS, Maria Josephine (University of the Philippines)

The paper argues that the contemporary Filipino woman's body can be described as both neo-colonial and globalized. The paper traces how the body has been transformed by Spanish and American colonization starting in the 16th century when Roman Catholic religion dominated Philippine life and condemned the body to be a "temple of sin" and thus should be hidden and untouched. This was characterized by the layers of clothing Filipinas had to wear during the Spanish colonial period in spite of the tropical heat. At the turn of the 19th century, when Spain ceded the Philippines to the United States, the Filipina body then became both a commodity and the receptacle of commodities. As the Filipina body was used to advertise liquor and cigarettes, it also had to continue to conform to Western standards of beauty through beauty products such as make-up, shampoos and conditioners, and the latest fashion styles and accessories. At present, the Filipina body not only continues to be influenced by neo-colonization (thus the proliferation of whitening products and South beach diet providers). The paper looks into websites showing "beautiful" potential Filipina brides, and patient/caring care-givers and domestic workers. In the former, the Filipina body is exoticized while in the latter, the Filipina's docility is emphasized. Thus, even with globalization, the "lessons" of colonization lives on.

Representing Sex and Sexuality in South Korea

LEE, Hyangjin (University of Sheffield, UK/Rikkyo University, Japan)

This study adopts a cross-cultural analysis of Japanese and Korean cinemas, in order to evaluate the unique and common characteristics of gender representation. A comparison of Japanese and Korean cinemas merits for this research with their close historical relationships. In particular, the shared 'Confucian' cultural traditions, the rapid Westernization process driven by external forces and the intensive experiences of the state-led modernisation process attest the contexts in which the cinematic discourses are situated. The films chosen for this study are four nonsensical comedies about the unpredictable behaviour of ordinary people who contradict themselves with the commitment to traditional community-oriented human relationships and their exposure to, or pursuit of, 'Western' ideals: *Death, the Japanese Style* (Ososhiki, 1984) and *Tampopo* (1986) made by Itami Juzo, *Farewell, My Darling* (*Haksaeng Bugun Sinwi*, 1996) and *301, 302* (1996), made by Park Chulsoo. In discussing the identity crisis in contemporary Japan and Korea represented in the four films, this study focuses on women's sexuality and role conflicts represented from male points of view. The creative and experimental imaginations of Itami and Park in interpreting the family melodramatic assets in the Japanese/Korean cinematic traditions are encapsulated in the symbolic usage of food and space division between the different genders. The various images of heroines portrayed disclose the contradictory needs of the patriarchy in adopting the ideals of tradition and modernity. Especially, the motifs of food combined with the codes and conventions of sexuality are used to express the absurdity of the colonial and post-colonial experiences of the people who seek to cope with the changes.

Women's Sexualities in Malaysia: Site of Contestations

WONG, Yuen Mei (University of Malaya)

In Malaysia, women's sexualities have become the site of cultural and political contestations. When examined closely, we will be able to identify the complex and intricate play of local, national and global forces on the body of women in Malaysia. In the mainstream media, women's sexualities become the nexuses of consumer culture and popular culture. Women's bodies are widely sexualized and objectified, and women's sexualities are the sites of desire, pleasure, and objectification. On the other hand, the struggles over political and cultural autonomy are often figured in relation to the women's bodies, especially women's sexualities. Political and religious groups consolidate its identity by projecting the sexual practices and gender behaviours it deems abhorrent. Women's sexualities are then subjected to various disciplining forces and regulations. Political expression itself becomes sexualized and women's sexualities become politicized. Ironically, the display and discourse of the women's bodies engender greater bodily self-consciousness as well as self-scrutiny among women themselves. Women attempt to change, explore their sexualities and identities through self-expression and contestation. This paper looks at the polemics, contradictions and paradoxes arise from the interplay of the various socio-political

forces mediating the women's bodies and sexualities.

The Politics of Gaze: the Relation between the Gazer and the Gazed

FUKAZAWA, Junko (Minato-ku Community Human Service Center, Tokyo)

In the spring of 2005, a man was arrested for keeping several women in confinement with a dog-collar for long and short periods of time. His behaviour is seen as a simulation of a certain game, in which you train a woman as if she is a domestic animal to obey you. In the midst of today's Japanese society, where women's sexualized images are everywhere, this case cannot be put away by saying it is only 'a peculiar case of an 'odd person who cannot distinguish fantasy from reality.' Nobody cannot deny the influence of mass visual images brought to us ifrom newspapers, TV, magazines, advertisements, videos, the internet, and games which pervade our daily activity and thoughts, as well as the concepts of gender and sexuality.

I have been analyzing the images of women in the media from the perspective of discrimination against women for more than 25 years. Since 1995, I held several workshops to decode the meanings behind the images of women, provided by the media and consumed by the public. Though the policies of equal opportunities was installed, the images provided by the media have continued to emphasize the gender role, and women as sexual objects for men, i.e., the sex to be looked at. There has been little change in the quality or quantity of those images. The change that has occurred is that visual images of men have started to be provided for men themselves. These images are used to promote commodities, such as fashion, accessories, cars, sporting and travel goods. They create the desire of self-realization among especially young men, by offering a model to aspire to.

Then, do women start to consume the male images just as men consume female images? To do that, they need to recover the subject of the gaze, because the act of looking can only be learned through cultural repetition.

Naming the Unspeakable: Reading Rape in Anchan's *On the Mouth of the World*

PRAGATWUTISARN, Chutima (Chulalongkorn University)

Sexual abuse has not been a topic of literary study until recently. The scarcity of sexual abuse narratives does not mean that sexual violence is rare in Thai society, however. In fact, one of the most important characteristics of narratives about sexual abuse is the tension between the desire of the abuse survivors to tell their stories and the anxiety that their narratives cannot be told. Here the issue of sexual abuse is inseparable from the issue of language, which is not only a medium of expression but a means by which the meaning of abuse is constructed and contested. This research paper examines why sexual violence has been unspeakable in Thai society by looking at the representation of rape in *On the Mouth of the World* (2003), the latest novel by Anchan, a SEA Write award winner. Although *On the Mouth of the World* is a novel about Ang, it is Jon, the male narrator, who is the author of Ang's story and who interprets and evaluates her from his point of view. In his narrative, Jon constructs Ang either as a good girl or a bad girl, a dichotomy that reflects his anxiety about her sexuality and his need to subjugate it. By insisting on telling her story and assuming

a role unrecognized by patriarchal society, Ang disrupts Jon's romantic notion of a hero rescuing a woman in distress, and prevents his story from achieving the satisfactory closure of a linear narrative. Ang's death at the end thus symbolizes the patriarchal violence against women whose stories are not assimilated into existing cultural narratives. Ang's voice, articulated from the strangely familiar world of the abuse victim, tells the story of a powerless and terrified victim of sexual abuse rather than a bad girl with perverted sexual desire.

De/Re Mythification in the short stories of Shashi Deshpande and Ambai
RAJALAKSHMI, Parthasarathy (Lady Doak College)

Feminist writers have long been interested in myth, arguing for either the recovery or invention of empowering myths for women. This paper discusses the treatment of Indian mythical themes and characters by contemporary Indian women writers, Shashi Deshpande and Ambai. Deshpande and Ambai make use of myths as an important literary device. The great epics, the *Ramayana* and the *Mahabharata* are loaded with texts and subtexts that perennially supply universal themes to the Indian creative writers. For generations, men have been in control of their cultural myths by creating as well as interpreting them. Interestingly many women writers today are found to question the truth behind some of the gender implications and societal values advocated by the ancient myths and reconstruct the mythical characters by deconstructing their stereotyped images. Their stories may be considered postmodern because they offer a double reading of traditional myths and their simultaneous subversion. Both writers draw upon the Hindu mythological themes and characters not for the representation of ideal behavioural paradigms as they are commonly used by the Indian society, but to expose the discriminatory patriarchal ideologies. They establish the idea that to bring any substantial change in the thinking process of a nation as a whole, a reinterpretation of the myths is quite necessary as it is a powerful medium that connects regions, generations and genders.

Passion, Immorality or Resistance Literature? :Redefining Women Sexualities in Indonesian Literature

VENNY, Adriana (Chief Editor of Journal Perempuan)

In such a very patriarchal society as Indonesia, women are often repressed to certain gender roles. It has been difficult for women to express their ideas and sexualities, but some female writers have started to speak up against what was considered in the past as taboos, though they are labeled as an immoral stream of literature. In this paper I would like to analyze three female writers who offer resistance to taboos and stereotyped morality: Ayu Utami, Djenar Maesa Ayu and Oka Rusmini. Utami's stories deal openly with women's sexuality from a woman's point of view. Ayu's stories deal with the issues of sexual violence. Rusmini, poet, writer and journalist, consistently commits to resistance, encouraging women not to be fatalistic as victims, but to be survivors.

Where do Combat Princesses go? The Changing Image of Women in Japanese ANIME
MURASE, Hiromi (Yamaguchi University, Adjunct Instructor)

The image and characterization of women in Japanese ANIME are becoming more and more varied as the industry itself strives in the world market. The traditional stereotypical characterisation of "docile, submissive, self-sacrificing, negative" girls is rarely seen today. For instance, the "combat" heroines are not the girls to "be protected" but "to protect", and are characterized as active ones who follow their own will. They have been particularly favoured among the newly created tradition of stories with active female protagonists. Their characteristics such as activeness, non-isolation, ability of self-realization, are the easy emblem of the independent women of today.

However, we need to take into account their parodies that treat these combat heroines as sexual objects, and also the recent trend called "MOE" in which the consumer segmentizes the heroines into many factors and favours only a few. This "MOE" trend is seen in both men and women, and, therefore, cannot be simply labelled as the objectification of women, hence discrimination against women. But it is also true, that some ANIME for girls are actually created to be consumed in the "MOE" trend. Such ANIME appears to be innocent dramas of combat heroines who are active, positive, pretty and independent, but behind the scenes, the wholeness of the heroines or the stories themselves are rendered completely irrelevant, and the segmentized parts of their bodies (i.e., hair or eyes) are consumed as erotic objects. It is unknown how it affects girls when they find out their adored heroines are, in fact, cut up like this and consumed as a sex toy. But, at least, one can claim that it does not contribute to making the lives of the girls any easier.

CGS International Workshop 2005Human Security and Gender in Asia: Humanities Perspectives
— Gender Representation in Asia —**Co-organized by:**International Christian University, Center for Gender Studies
21st Century Center of Excellence Program
"Research and Education for Peace, Security and Conviviality"**Place:**

International Christian University

Date:

16 – 18 September, 2005

16th (Fri)

9:00 – 9:20 Opening (Administration Bldg, No 206)

9:20 – 11:20 Session 1 Overview of Gender Representation (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Tanaka Kazuko
Japan (Kitahara Megumi)
Japan2 (Kitada Sachie)
Korea (Lee Hyangjin)
China (Yang Lixin)

11:20 – 11:35 Break

11:35 – 12:55 Session 2 Overview of Gender Representation (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Hibiya Junko
Malaysia (Wong Yuen-Mei)
Indonesia (Adriana Venny)
India (Parthasarathy Rajalakshmi)

13:00 – 14:50 Cinema Luncheon (Alumni House 2 F)

13:00-13:20 Lunch

13:20-14:20 "30 years of Sisterhood"

14:20-15:00 Talk and Discussion (Yamagami Chieko, Seyama Noriko)

15:10 – 17:00 Forum Theatre Performance (New Diffendorfer Memorial Building)

Consider Gender in Daily Life through a theatrical performance.

(Assisted by Forum Theatre, Takemori Shigeko, Hanasaki Setsu, Narusawa Tomio)

17:30 – 19:00 Session 3 Overview of Gender Representation (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Shaun Malarney
Thailand (Chutima Pragatwutisarn)
Philippine (Maria Josephine Barrios)
Vietnam (Phan Huyen Thu)**17th (Sat)**

9:20 – 11:00 Session 4 Language, Expression and Power (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Jean-Pierre Besiat
Yang Lixin
Phan Huyen Thu
Hibiya Junko with students

11:00 – 11:20 Break

11:20 – 12:30 Session 5 What is Art?: Body, Beauty and Gender (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Kato Etsuko
Nishiyama Chieko
Maria Josephine Barrios

12:30 – 13:30 Lunch

13:30 – 15:30 Session 6 Representing Sex and Sexuality (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Shimizu Akiko
Lee Hyangjin
Wong Yuen-Mei
Fukazawa Junko
Chutima Pragatwutisarn

15:30 – 16:00 Break

16:00 – 17:30 Session 7 Toward a New Horizon: Redefining the Concept of Gender
(Administration Bldg, No 206)Chairperson: Ito Aki
P. Rajalakshmi
Murase Hiromi
Adriana Venny

18:00 – 20:00 Reception at Dining Hall

(Students' performances, Japanese Drum, Original Dance)

18th (Sun)**Asian Film Showcase —Telling Tales Differently (Science Hall 220, N-kan 220)**

9:00 – 10:20 "Venus" and "Tokyo Stupid Girls" and "Khoa" with Directors' Talk

10:20 – 11:40 "A Wedding Gift" with Director's Talk

11:40 – 13:00 "Nu-Shu" with Director's Talk

13:00 – 13:50 Lunch

13:50 – 15:20 Panel Discussion with Directors: Telling Tales differently

(Science Hall 220, N-kan 220)

Chairperson: Saito Ayako

15:30 – 17:00 Summary Session (Administration Bldg, No 206)

Chairperson: Ikoma Natsumi

CGS 第二回国際ワークショップ

アジアにおける人間の安全保障とジェンダー: 人文科学の視点から
——アジアのジェンダー表象——

共催

国際基督教大学ジェンダー研究センター
21世紀 COE プログラム「平和・安全・共生」

開催場所

国際基督教大学

日時

2005年9月16日-18日

プログラム

9月16日(金)

9:00-9:20 オープニング (本部棟 206号室)

9:20-11:20 セッション1 アジア各国のジェンダー表象概論1 (本部棟 206号室)

司会 田中かず子

日本 北原恵 (甲南大学文学部)

北田幸恵 (城西国際大学人文学部)

韓国 イ・ヒャンジン (シェフィールド大学)

中国 ヤン・リクシン (南京師範大学)

11:20-11:35 休憩

11:35-12:55 セッション2 アジア各国のジェンダー表象概論2 (本部棟 206号室)

司会 日比谷潤子

マレーシア ウォン・ユエンメイ (マラヤ大学)

インドネシア アドリアナ・ヴェニー (ジャーナル編集長)

インド パルタサラティ・ラジャラクシュミ (レディ・ドーク大学)

13:00-14:50 シネマ・ラッシュ (アラムナイ・ハウス2階)

13:00-13:20 ランチ

13:20-14:20 『30年のジスターワッド』

13:20-14:50 山上千恵子監督、瀬山紀子監督のトークとディスカッション

15:00-17:00 フォーラム・シアター・セッション (新D館多目的ホール)

学生達が日常のジェンダーを演劇化し参加者達とフォーラムを持ちます。

協力 フォーラム・シアター、竹森茂子、花崎摂、鳴沢富雄

17:30-19:00 セッション3 アジア各国のジェンダー表象概論3 (本部棟 206号室)

司会 ショーン・マラーニ

タイ チュティマ・ブラガットウティサーン (チュラロンコン大学)

フィリピン マリア・ジョセフィン・バリオス (フィリピン大学)

ベトナム ファン・フエン・トゥ (ドキュメンタリー映画監督・脚本家)

17日(土)

9:20-11:00 セッション4 言葉、表現、パワー (本部棟 206号室)

司会 ジャン=ピエール・ベジア

ヤン・リクシン (南京師範大学)

ファン・フエン・トゥ (ドキュメンタリー映画監督・脚本家)

日比谷潤子 (国際基督教大学)

11:00-11:20 休憩

11:20-12:30 セッション5 アートとは何か?: 身体、美、ジェンダー (本部棟 206号室)

司会 加藤恵津子

西山千恵子 (東京国際大学)

マリア・ジョセフィン・バリオス (フィリピン大学)

12:30-13:30 ランチ

13:30-15:30 セッション6 性とセクシュアリティの表現について (本部棟 206号室)

司会 清水晶子

イ・ヒャンジン (シェフィールド大学)

ウォン・ユエンメイ (マラヤ大学)

深瀬純子 (港区コミュニティーカフェ・ヒューマンサービスセンター)

チュティマ・ブラガットウティサーン (チュラロンコン大学)

15:30-16:00 休憩

16:00-17:30 セッション7 新たな地平線へ: ジェンダー概念を再定義する (本部棟 206号室)

司会 伊藤亜紀

パルタサラティ・ラジャラクシュミ (レディ・ドーク大学)

村瀬ひろみ (フリーライター)

アドリアナ・ヴェニー (ジャーナル編集長)

18:00-20:00 レセプション (学生による和太鼓演奏、創作ダンス上演) (食堂)

18日(日)

アジア・フィルム・ショーケース: 新しい物語の地平をめざして (N館 220号室)

9:00-13:00 映画上映と監督のトーク

9:00-10:20 『venus』 監督 ソン・インソク他

『Tokyo Stupid Girls』 監督 根来 祐

『Khoa』 監督 ファン・フエン・トゥ

10:20-11:40 『The Wedding Gift』 監督 イ・ジョンファ

11:40-13:00 『女書』 監督 ユーチン・ヤン

13:00-13:50 ランチ

13:50-15:20 質疑応答、ディスカッション (N館 220号室)

司会 斎藤綾子 (明治学院大学助教授)

パネリスト 根来 祐

ファン・フエン・トゥ

イ・ジョンファ

ユーチン・ヤン

15:30-17:00 まとめのセッション (本部棟 206号室)

司会 生駒夏美

